

に小鳥の啼き聲を聞く、下諏訪神社なり、境内より湖水を臨めば殆んど青疊を敷きたる如く、又た上方を望めば山嶺聳えて、恰も別天地の感あり、此處にて二三の鉛筆スケッチを爲し、更に湖畔に向ふて行くこと二三丁、この地の名物風車水車の設けたる大觀に接し、悦ばしき限りなし、沼地有り、蘆は茫々として、水面は微風に揺れたり、此處をと三脚に腰をすえ、連山を遠景に、水面及び蘆を近景とし九つ切に描き初む、時に一時、漸くに一枚を仕上げ、有合御着と書せる一茶店に入る、室は古代と思しく天井無く柱皆クソムソムソレーキ色を爲す、晝餉を済まし後暫時の休息寫生帖に簡單なる水繪を抽く、歸路夕陽斜めに、清流は、金色に輝きて眩き許りなり、行くこと四五丁、日は次第に西に没し、月は頭上に淡白く現はる、肥臭き茅舎蕭疎たる間を通り過ぎ、神祠の垣の側に出て、湯の花鬻ぐ商家を餘所に見つゝ、白燈煌々頃再び三層樓の客となりぬ。

ノートの中より

紅

靜

- 一、濃淡色の調子は飽くまで自然でなければならぬ。
- 一、最初は成るべく部分を見ぬ様にして、其の全體を見なければならぬ。
- 一、或る場合の外は部分々々より仕上ることなく、全體を同時

に仕上る様にしなければならぬ。

- 一、濃淡色彩筆趣の裡に、よく全體の感じが顯はれ、又個性の感じも見えなければならぬ。
- 一、自然美は見えぬ處に澤山その分子を含むて居るから活眼して研究しなければならぬ。
- 一、一點一劃の正確、又色彩の完全は俱によく自然を思はしむ。
- 一、簡單な色が中々解らぬ、青くも赤くも黄なくも見える。
- 一、繪具の撰擇着色の順序方法を誤ると不結果に終るから、筆をとる前に、先づ自然の調子を呑み込み、其の畫くべき順序や方法を案じなければならぬ。
- 一、執筆中は極めて平然として、頭を平等に配らなければならぬ、余り自然に惚れ過ぎて、其の結果自然の捕虜になると稍もすると無意識に筆が走ることもある様だ。
- 一、陰陽の裡には恐ろしき自然の神秘がある様だ。
- 一、さて三脚を据えて見ると、より新らしき感興を見ることがあると云ふのは、自然美の深遠崇高なるところで、素通り位の尋常の見方では見せてくれない、三脚据えてもまだ其の蘊奥は中々見せてくれない、イヤ自然は見せて居るけれど、我々の信仰が足らぬから見得ないのである、見得る丈でもあたから其の恩を無にするではないか。
- 一、寫生中は終始最初の印象を記憶して、寫生中に種々の原因より起る他の印象は放棄しなければならぬ、然し寫生中に、新らしき他のデリケートな、最初より優つた印象を得ると中

々棄て難いものだ、着色したる程度に依つては、新たなる印象をとつて全々最初の印象を棄てることもある。

一、寫生中は時々目を静養しなければならぬ、新らしき活眼を以て見る必要である、余り自然に拘束されて、神經に疲労を生ずると、見得べきものも見えず、畫面に齷齪して自然を忘れる憂がある、時々新らしき眼を以て見るときは、其の位置に於て未だ氣付かざりし美を授かることがある、其結果は大なるものである。

一、生命ある自然を見て、機械的に光線や形や色によつて、それで自然の感じや物質を表はさふとためである、ある程度までは全く自然と同化しなければならぬ、所謂無我の境に入つて自然そのものになつて、自然の心情を輸入しなければならぬ、千里眼の様に木皮の中に居る虫までも見る必要はない、自然を機械的に味ふと共に精神的に味はなければならぬ。

一、畫は手で畫くものでない、目ばかりで畫くものでもない、頭でかゝなければならぬ。即ち頭に感じた有様を畫かなければならぬ。

一、小なる誤筆は發見し難く、補筆して以て始めて其の非を解り、其の結果に驚く盲なるかな。

一、我々は幾何學の理を知つて、其の基本たる推理の基礎たるべき公理を知らぬ様なものだ、川の本流を知つて、其の源泉を知らぬ様なものだ、我々は結果を知つて根元を知らぬ、自

然にも、公理となるべき、源泉ともなるべき、自然美の根元が奥深く潜むで居る様だ、我々は逆路をとつて、公理源泉を尋ねるのだ、その幾分は先輩によつて發見されて居るが、起因すべき公理や源泉は、まだくゞ澤山あるらしい、我々は信仰の力によつてそれらを得むとするのだ、その信仰は積むで以て愈自然美を味ひ、絶對なる自然を眞から味ふことが出来る様になる。

夕陽の大阪月の京都

龜岡 凌風 生

汽車が梅田驛を發したのは、早や夕暮であつた。西の空が金色に輝いて、地平線近くは薔薇色にぼかされて居る。それがあの廣い澱の水に映つて、空も水も燃えたつ様にゆらくとする。空はだんくゞ綺麗になる。それが水に映るたびに自分は幾回となく胸を躍らせた。

大阪の街は今夕陽に包まれて盛んに立ち昇る煤煙までが赤熱されて夕陽の大陽は眞に美しいと思つた。

さしにも美しかつた夕映も次第に消えて淡紫のゆかしい色と變る。山崎を過ぎた頃フト東を見ればいつの間にか満月が高く蒼空に懸つて居る。京都に近づくとつれて、月と京都とが何となう離すことの出来ぬやうな感がする。東山も加茂川も、さては京都の街も、皆この月に調和するやうに思はれた。

夕陽の大阪、月の京都と幾回も繰返すうちに何となう其中に意味がありそやうなものと夢のやうなことを考へ始めた。